

2023. 4. 30 (日) 使徒7:54~58

7:54 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりしていた。

7:55 しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、

7:56 「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。

7:57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到した。

7:58 そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけた。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた。

<説教>

本日の聖書箇所には、ステパノの弁明、説教を聞いたユダヤ人たちの反応、応答の様子が記されています。ステパノが最高法院に訴えられた理由は、彼がモーセと神を冒瀆している、聖なる神殿とモーセの律法に逆らっているということでした。そして、あのナザレ人イエスと同じことを言っている、イエスの仲間だ、ということでした。

しかし、それらの理由は、イエスがキリストであることを〈知恵と御霊〉によって証しし語っていたステパノに対抗することができなかつたユダヤ人たちによってそそのかされた人たちの証言であり(6:11)、〈偽りの証人たち〉(6:13)の証言であって、そもそも初めから悪意と敵意しかない不当な訴えでした。

「そのとおりなのか」と大祭司から尋問されたステパノが応答し、語った言葉がステパノの説教です。ステパノの周りには、彼を訴えた人々、彼らが立てた偽りの証人たち、彼らに扇動された民衆、長老たち、律法学者たちがずらりと居並んでいました。その中でステパノはたった一人で立ち、彼ら人間を恐れることなく語り、弁明し、説教しました。それは彼が常に聖霊に満たされていたからであり、その聖霊によって開かれ明るくされた目で〈神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見〉(7:55)ていたからでした。

ステパノがこのときの弁明、説教で証しし、明らかにしたかったことは、自分のことではなく、ステパノをもお召しになった〈栄光の神〉(7:2)のことであり、モーセほか神の預言者たちが〈前もって告げた〉〈正しい方〉(7:52)イエス・キリストのことであり、ステパノのうちに満ちておられた聖霊のことでした。そして「うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。…今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」(7:51-53)とステパノが指摘したとおり、ステパノを訴えている人々の罪のことでした。更にはペテロと全く同じように、「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」(2:38-39)ということだったはずで

しかし、そのときステパノの語った言葉を聞いていた人々は、いかんせん〈心と耳に割れを受けていない人たち〉(51)でした。つまり外見は信仰深そうにしているも、心が正しく神に向いておらず、神のみことばに聞き従っていない人々でした。それ故にイエスをキリストと認め信じようとしないで殺した人々でした。だからステパノの真実な言葉を聞いても彼らは〈はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしり〉したのです(54)。

しかし、そんな大勢の人々の自分への明らかな怒りや憎しみの様子を見たステパノはどうしたのでしょうか。〈聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。〉(55-56)のです。場所は最高法院の議場でしたから、ステパノは特に外の空を見上げたということではありません。彼は霊の目、信仰の目で「天はわたしの王座」(49)と言われる父なる神の栄光と、その神の右に立っておられる御子イエスを見たのです。「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。」とイエスは言われました(マタイ 5:8)。ステパノはまさにその人でした。「天が開けて」と彼は言いましたが、これは彼が「天をこじ開けた」ではありません。神がステパノの霊的な目を明るくしてくださり、神がステパノに明らかに示し見せてくださったのです。だから、その場の人々が上を見ても、建物の天井しか見えなかったことでしょう。

「人の子が神の右に立っておられるのが見えます」。このステパノの証言によって、それまで既に〈はらわたが煮え返る思い〉になっていた人々の怒りが爆発しました。〈人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけ〉(57-58)ました。石打ちの刑に処したのです。石打ちは神を冒瀆する者らに対するユダヤ式の刑です。ユダヤ人たちはステパノを神を冒瀆する者として訴え、裁判をしていましたから、何とかステパノの弁明の言葉尻をとらえて神冒瀆の証拠としたかっただけかもしれませんが、彼の口から神冒瀆の言葉は聞かれず、一方、自分たちの罪が鋭く指摘されたのでした。しかし、ついにステパノの口から神冒瀆の言葉が出たのです(もちろん、ステパノを訴えた側から見た神冒瀆です)。

このステパノの言葉がこんなにも彼らを怒らせ、石打ちにしたのはなぜか。それは彼がイエス・キリストを差し示したから、彼らが憎み、裏切り、殺したイエスのことを思い起こさせたから、イエスを拒み殺した彼らの罪を改めて示したからにはほかありません。つまり、イエスご自身が地上におられたとき、まさにこの同じ最高法院の場で同じ大祭司たちユダヤ人たちの前でご自分のことを証言なさっていたのです。「今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。」(ルカ 22:69)と。更に続く「では、おまえは神の子なのか。」との問いに、「あなたがたの言うとおりに、わたしはそれです。」とイエスはお答えになりました(同 22:70)。こうして彼らはイエスを神冒瀆者として罪に定め、死刑に値するとしたことでした。そしてステパノは、イエスがあの裁判のときの証言どおりに、現に今、神の右におられると言ったのです。もうこれ以上ステパノに語らせはなりませんでした。

天の父なる神と御子イエス・キリストが聖霊によってステパノにお見せになったイエスは神の右に「立って」おられました。それは、「座して」おられた(特にそれは「支配」を象徴するとされる)イエスが、そのときはステパノをご自分のもとにお迎えになるために立ち上がり、身を乗り出してくださっていたのだ、と見ることができます。それでステパノは「主イエスよ、私の霊をお受けください。」(7:59)と祈り、心安んじてイエスに身

をお委ねできたのです。またはこうも考えることができます。ちょうどステパノが地上の法廷で大祭司の前に立ち、偽りの証人たちの前に立ってイエスを証言している今、そのとき、〈神の子〉であり〈人の子〉であるイエスが神の天の法廷で父なる神の前に立ち、御使いたちの前に立ってステパノのことを証言してくださっていたのだ、と。「あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。」(ルカ 12:8)とイエスは弟子たちに約束しておられました。

このようなイエスのお姿を見たからこそ、ステパノは〈からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れ〉(同 12:4)ることなく、彼らの前で堂々とイエス・キリストを認め、証言できたのです。また、すぐ後で、体は一時痛めつけられても、心は平安のうちであり、自分をイエスにお任せできたのです。主イエスは今も同じ励ましと約束をイエスの証人たる私たちに与えて続けておられます。